

ASIANALYSIS XII 報告

マレーシアのクアラルンプールで開催された ASIANALYSIS X 及び中国の南京で開催された ASIANALYSIS XI において、日本が ASIANALYSIS XII を開催することに決定した。日本分析化学会の学術担当副会長として国際諮問委員会に出席していた立場上、早急に開催場所と開催責任者を決定して頂くように執行部をお願いした。決定に時間を要したので、少し強く迅速な対応をお願いしたところ、中村会長から直々に連絡があり小職に ASIANALYSIS XII を計画して実施するようにご下命があった。正に、「晴天の霹靂」と言う心境であった。日頃の言動は慎重にすべきだとの教訓を改めて感じた。これを機に、この名誉ある仕事を全力で実施するため ASIANALYSIS を開催した先生方のご教示を受けることにした。また、九州大学の先生方を中心として実行委員会を作り、ご支援を受けることにした。

準備がようやく一段落し、明日から会議が無事開催されることを念じているとき、本会事務局長からメールが届いた。それによると中国から移動する予定の寺前会長の飛行機が、機材トラブルで一日目に到着できないとのことであった。会長には開会式での挨拶をお願いしており、一旦講演が始まった後に挨拶を行うというわけにもいかない。また、わが国を代表するプレナリー講演もお願いしており、今更代わりをとはいかない。前日の会場の手配や打ち合わせ中も情報を収集しながら、何時なら到着できる見込みがあるか、その到着時刻であればプログラムをどのように変更すればよいか、関係者と何度も打ち合わせした。正に綱渡りの状態で、とにかく当日は臨機応変で行くしかないということになった。

2013年8月22日(木)から8月24日(土)の間、福岡市の九州大学馬出キャンパス(病院地区)の百年講堂で ASIANALYSIS XII を開催した。9時30分から組織・実行委員として小職が開会の挨拶をした後、前日の深夜の依頼にもかかわらず快くお引き受け頂いた山田副会長から寺前会長の祝辞が代読された。引き続きシンガポールの Hian-Kee Lee 教授のプレナリー講演者の後、タイの Kate Grudpan 教授のプレナリー講演を繰り上げて実施した。出席者全員の集合写真を撮影した後、昼食時間を11時から取るように変更し、寺前会長のプレナリー講演を12時30分に設定した。これに間に合わないようであれば、さらにポスターセッションを前倒しするしかない。祈るような気持ちでお待ちしていたところ、11時30分頃に会場に到着され、大変安堵した。寺前会長からは、「地獄で仏をみた」当方の顔が見えた



1日目の受付風景



寺前会長のプレナリー講演

に違いない。小職も喜びのため、一瞬、寺前会長を抱きしめたくなった。

ASIANALYSIS XII では、国内169名、国外145名、合計314名の参加者があった。参加者は、一般199名、学生115名であった。講演者の内訳は、プレナリー講演3件、キーノート講演8件、招待講演21件、口頭発表98件、ポスター発表119件である(若干のキャンセルを含む)。これには小職を含め、講演を行っていない実行委員の数は含まれていない。

今回の会議では、3件のシンポジウムが企画された。すなわち1日目に渡會 仁先生のお世話で、教育に関する“The Third Symposium for Education of Analytical Chemistry”が開催された。小職も拝聴させて頂いたが、熱心な討論が行われ大変盛況であった。また、2日目に長崎国際大学の佐藤 博先生のご尽力により、“The 2013 China-Japan-Korea Symposium on Analytical Chemistry (CJK 2013)”が開催され、今回の



ポスター発表



レセプション



教育シンポジウムの参加者



国際諮問委員

ASIANALYSIS XII が盛会になる一因となった。また、九州大学の東アジア環境研究機構の支援を受け、“International Symposium on Environmental Science and Technology in Asia”を小職が実施した。シンポジウムの開催にあたり同機構を代表して挨拶をして頂いた工藤和彦先生には、この場を借りてお礼を申し上げる。

第一日目の夕方にはレセプションを開催した。参加者の皆様は十分に楽しみ、アジア各国の方々と親睦を深められたように思う。とくに若い方の参加で会が盛り上がり、年配の先生方も若やいだ雰囲気でも過ごされたようである。

今回の会議の開催に当たって、参加者数を増やすための方策について頭を悩ませ、その結果「マリエラクルーズ」で博多湾の夜景を見ながら懇親会を実施することにした。学会の参加者全員を招待することにしたので、費用も多くなることが懸念されたが、登録者が多くなれば必ずしも赤字になることはないと考えて決断した。当初は損益分岐点を200名前後と見込んで参加者を増やす努力をしていたが、登録締め切り間際になり登録者数が320名を超えることがわかり、主催者側が却ってパニックに陥った。すなわち、乗船者数が250名となっていることから、希望者を全員乗せることができなくなったのである。さらに、WEB登録の分かり難さや希望変更、主催者の乗船クーポンの配布ミス、最後には旅行代理店の手配ミスまで加わり、混乱に輪をかけることになった。学会と旅行社の担当者は、別室で1枚1枚

クーポンを数えながら嘆息していたが、そうすれば状況が改善されるわけでもない。最後は、実行委員と研究室の学生を下船させることを覚悟し、とにかく乗船希望者のクーポンを回収しながら順次乗船してもらうことにした。最後は、(報告を受けた限りでは)乗船者は当初期待した定員のとおりの約250名となり、奇跡的に問題は生じなかったとのことである。「神のご加護があった」と言うべきかもしれないが、ここでは小職の「日頃の心がけがよかった」ということにさせて頂きたい。

脇田久伸先生を委員長とするポスター賞選考委員会において7名の受賞者を選出し、マリエラクルーズ中の懇親会で表彰を行った。各国の若手研究者から喜びの言葉を伺い、アジアにおける分析化学のレベルの高さを実感した。ポスター賞のスポンサーとなって頂いた Analytical Sciences 誌に対して、ここに厚く御礼申し上げる。マリエラクルーズでは、別室で国際諮問委員会を開催し、今後のASIANALYSISの運営について協議した。寺前会長にもオブザーバーとして参加して頂いた。まず、前回より開催国として立候補していたタイからASIANALYSIS XIIIをチェンマイで開催したい旨の正式表明があり、これを全会一致で承認した。その直後に懇親会で参加者にその旨を紹介し、今後の支援をお願いした。今回の国際会議では、責任者のKate Grudpan教授を始め大学院生を含めた多数の研究者が参加してお



マリエラクルーズ

り、次期開催国としてタイの意気込みが感じられた。なお、次々回についても立候補があり、今後準備期間が2年間では短いことを勘案し、タイにおける開催以前に最終候補地を絞り込むことにした。次々開催国についても、数か国から非公式な打診があり諮問委員の間で議論した。このように ASIANALYSIS は、アジアにおける分析化学の国際会議として広く認知され、アジア各国が国際会議として誘致に力を入れている。

最終日の午後に、中野幸二先生のお世話でラボツアーを実施した。九州大学伊都キャンパスを訪問して頂き、幾つかの研究室を見学して頂いた。当初は、若手の人の参加を見込んでいたが、意外にも各国を代表する著名な先生方も多数参加されており大変恐縮した。最終日の最後とあって参加者は疲れておられたと思うが、わが国の研究室を見て頂く機会を設けたのは大いに意義があったと考えている。

本会議を開催するに当たっての反省点について幾つか言及したい。まず、開催時期であるが、どのように検討してもよい時期がない。たとえば9月や3月は学会が多く開催され、時期的に好ましくない。しかし、その他の時期では教員が講義を休む必要がある。このため最終的に夏休みに実施することにした。しかし、他の国際会議でも事情は同様で、8月の中旬以降に集中する。当方の日程決定後に他の学会と重なっていることが判明したが、こちらの日程を変えるわけにもいかない。さらに困ったことは、この時期は大学院入試等と重なり、多くの先生方にご迷惑をおかけすることになった。こちらの研究室でも学部4年生は大学院入試直後から学会の手伝いをしてもらうことになり、修士1、2年生は試問会



ラボツアーの参加者

が重なって教育上好ましくなかった。事情は各大学、研究室でも同様と思われる。開催時期については選択の余地が小さいが、それでも十分な事前検討が必要であったと反省している。一方、参加者サービスの点から幾つかご迷惑をおかけした点をお詫びしたい。福岡の夏は通常30度前後で、それほど過ごし難いものではない。しかし、今年は37、38度の気温が連日続いた。開会挨拶において会期中は上着とネクタイの着用は不要とお伝えしたが、これも事前に通知すべきであった。また、食中毒を懸念して昼食は提供しなかったが、参加者は炎天下に昼食に出かけることになり、主催者として大変申し訳なく思った。

最後に、今後の ASIANALYSIS のあり方について私見を述べさせて頂きたい。本会議は、日中分析化学討論会が母体となって発足し、それ以来わが国がリーダーシップをとって運営されてきたように理解している。以前は、アジアの国々で分析化学を専門とする人々が研究の交流を目的に開催してきたが、現在では世界の中でも経済活動の3大拠点の一つとしてアジアの重要性が高まっており、アジアを一つのユニットとした活動を視野に入れるべき時期に来ている。すなわち、研究だけでなく教育を含めた交流、さらに社会、経済活動を視野に入れた相互支援など、本会としても長期的視野に基づいてリーダーシップを発揮する体制を構築する必要がある。国際諮問委員会では、幸いにもわが国は好意的に迎えられており、アジア諸国の研究者と連携を深めていく上で好ましい位置にいると考えている。現在までの諸先輩の努力に感謝申し上げるとともに、今後の若い人々の益々の活躍を期待したい。

〔九州大学大学院工学研究院 今坂藤太郎〕